

Ⅱ 具体的な取組

1 関係機関の参画による地域連携コンソーシアムの形成

障がい当事者に加えて、医療・福祉・教育等の関係者によって構成される地域連携コンソーシアムを形成し、全道各地の取組の現状や課題を共有するとともに、学校卒業後における障がい者の学びの場の整備・拡充や情報共有の仕組み等について協議する場を設けた。

① 地域連携コンソーシアム会議

○趣旨

地域連携コンソーシアム会議は、学校卒業後における障がい者の学びの場の整備・拡充や情報共有の仕組み等について協議することを目的として開催する。

○主な議題

- ・地域全体の障がい者の生涯学習や共生社会の実現に資する学びのシステムの構築に向けた具体的な連携に関する事
- ・モデル事業の検討や評価に関する事

○コンソーシアム構成員

氏名	構成機関名	専門分野
土畠 智幸	医療法人稲生会	医療法人
大原 裕介	社会福祉法人ゆうゆう	社会福祉
中村 祐子	北海道社会福祉協議会	
宮崎 隆志	北海道文教大学	大学
志水 幸	北海道医療大学	
安井 友康	北海道教育大学札幌校	
篠田 佳寿	北海道真駒内養護学校	特別支援学校
三浦 貴徳	北海道札幌あいの里高等支援学校	
杉澤 洋輝	いっしょにね！文化祭実行委員会	文化団体
吉岡 亜希子	父親ネットワーク北海道	社会教育団体
紺野 順子	DPI北海道ブロック会議	障がい当事者団体
五十嵐 真幸	NPO 法人カムイ大雪バリアフリー研究所	
内山 充人	岩見沢市（健康福祉部）	行政関係者（市町村）
伊藤 信幸	白老町教育委員会（生涯学習課）	
菊池 幸次	保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課	行政関係者（北海道）
山内 功	学校教育局特別支援教育課	
本田 憲司	北海道立生涯学習推進センター	

事務局：北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課

② 障がい者の受入体制向上のための啓発用資料の作成・活用

- リーフレット「障がいのある方の学びの体制を構築するために」の配布
 - ・配布先・・・各道立施設、市町村立施設等

令和6年度 「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」 地域連携コンソーシアム会議（第1回）

次 第

- 1 開 会
- 2 構成員紹介
- 3 主催者挨拶
- 4 議 事
 - (1) 挨拶及び行政説明
【文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課
障害者学習支援推進室】
 - (2) 事業説明
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」について
【北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課社会教育指導係】
 - (3) 調査研究説明
今年度実施予定の調査研究について
【北海道立生涯学習推進センター】
 - (4) 説明・協議
「ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道」に
ついて
【北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課社会教育指導係】
 - (5) その他
各構成員からの情報提供など
- 5 閉 会

<期 日> 令和6年8月27日（火）14:00～16:00

<方 式> ハイブリッド方式（道民活動センタービルかでの2・7）

令和6年度「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」
地域連携コンソーシアム会議（第1回）報告書

- 1 日 時 令和6年8月27日（火）14：00～15：40
- 2 会 場 ハイブリッド開催（会場：道民活動センタービルかでの2・7）
- 3 出席者 構成員15名（会場7名、オンライン8名）、代理出席1名、同席者1名、
文部科学省2名、事務局・説明者6名
- 4 内 容 (1) 開 会
(2) 構成員紹介
(3) 主催者挨拶
(4) 内 容
 - ①行政説明（文部科学省）
 - ・資料をもとに、本事業を実施する背景・経緯、今年度の取組や令和5年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」（概要）の説明のほか、取組を推進していくための参考資料や読書バリアフリーについての情報提供をいただいた。
 - ②本事業の概要についての説明（社会教育課、生涯学習推進センター）
 - ・資料をもとに、これまでの成果・課題と今年度の取組及びワーキングチームの概要について説明を行った。
 - ・構成員からは以下のような意見があった。
 - 障がい者の生涯学習については、市町村ごとに前提条件（例えば障がい者施設の有無等）が違うので、先進地視察の際は前提条件を整理してまとめることで取組の有意義な発信となるだろう。
 - 障がい者の生涯学習を特別なものにならないためという考え方をもちつつも、きっかけとしての取組に意味はあるだろう。
 - ③「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道」についての説明
 - ・協議（社会教育課）
 - ・資料をもとに、昨年度実施したコンファレンスの概要と今年度実施予定のコンファレンスの内容案について説明を行った。
 - ・「同じ目線（車椅子）」というコンセプトについては、前向きな意見が多く、構成員にそれぞれの立場からの協力をお願いすることができた。
 - ・構成員からは、「障がい＝車椅子」という単純な発信とならないような配慮が必要という声や、コンファレンスの中で他の障がい種についても扱う場面があっても良いのではという声があった。
 - ④その他
 - 各構成団体からの情報提供や意見・感想などをいただいた。
- (5) 閉会

令和6年度 「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」 地域連携コンソーシアム会議（第2回）

次 第

- 1 開 会
- 2 主催者挨拶
- 3 議 事
 - (1) 報告
障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業の進捗状況について
【北海道教育庁社会教育課】
 - (2) 報告・協議
ワーキングチームによる調査研究について
【北海道立生涯学習推進センター】
 - (3) 説明・協議
「障がい者の学びの体制の構築について～社会教育施設等の受入体制のさらなる向上に向けて～」(R7版)について
【北海道教育庁社会教育課】
 - (4) その他
 - ・各構成員からの情報提供など
 - ・文部科学省から（ご感想及び情報提供）
- 4 閉 会

<期 日> 令和6年11月11日(火) 15:00～17:00

<方 式> ハイブリッド方式（道民活動センタービルかでの2・7）

令和6年度「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」
地域連携コンソーシアム会議（第2回）報告書

- 1 日 時 令和6年11月11日（月）15：00～17：00
- 2 会 場 ハイブリッド開催（会場：道民活動センタービルかでの2・7）
- 3 出席者 構成員13名（会場5名、オンライン8名）、代理出席1名、同席者1名、
文部科学省2名、事務局・説明者5名
- 4 内 容 (1) 開 会
(2) 主催者挨拶
(3) 内 容
 - ①事業の進捗状況についての報告（社会教育課）
 - ・資料をもとに、事業の進捗状況の報告を行った。
 - ・構成員からは、コンファレンスの案内が遅かったとの指摘があった。開催日、会場（参加に長移動の距離があるか）や飲食（経費の負担があるか）という情報は、参加予定者への早い周知が必要で、特に当事者には、ヘルパーの派遣等、参加に向けてさまざまな調整・準備を必要とする方もいる。
 - ②ワーキングチームによる調査研究についての報告・協議（生涯学習推進センター）
 - ・資料をもとに、ワーキングチームでの調査研究についての報告・協議を行った。
 - ・構成員からは以下のような意見があった。
 - 地域住民の自治やつながりをオーガナイズするためには、当事者や支援者の方の参画が重要で、どのようにそういった場をつくるかというのが課題と言える。
 - 観点を絞った調査研究を行い、キーとなる人材や、その人の果たした役割に焦点を絞ることで、汎用性のある研究につながるだろう。
 - 地域にある資源を活かすことや、「我々の活動、我々の学びの場」という意識の共有が重要。そういった意識を持てる仕掛けや環境整備をどれだけできるかがポイントとなり、そのためには、地域それぞれの地域性の整理も必要だろう。
 - 少子高齢、人口減少社会では、誰もが参加しやすく、コミットせざるを得ないというところでネットワークを作っていくことも重要。誰がどのように動いて地域づくりを進めて行ったのかという内容もまとめて発信してもらいたい。
 - ③「障がい者の学びの体制の構築について～社会教育施設等の受入体制のさらなる向上に向けて～」(リーフレット)についての説明・協議（社会教育課）
 - ・資料をもとに、改訂を予定しているリーフレットについての説明・協議を行った。
 - ・チェックリストにある内容を備えていればそれで良いという訳ではなく、地域で行われている小さな取組を奨励して周知するような用途もあるとの意見があった。
 - ④その他
各出席者から情報提供や意見・感想などをいただいた。
- (4) 閉会

令和6年度 「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」 地域連携コンソーシアム会議（第3回）

次 第

- 1 開 会
- 2 主催者挨拶
- 3 議 事
 - (1) 報告
障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業 令和6年度報告について
【北海道教育庁社会教育課】
 - (2) 報告・協議
共に学び、生きる共生社会コンファレンスin北海道 開催報告について
【北海道教育庁社会教育課】
 - (3) 説明・協議
「障がい者の生涯学習調査研究」について
【北海道立生涯学習推進センター】
 - (4) その他
 - ・各構成員からの情報提供など
 - ・文部科学省から（ご感想及び情報提供）
- 4 閉 会

<期 日> 令和7年1月29日（水）10:00～12:00

<方 式> ハイブリッド方式（道民活動センタービルかでの2・7）

令和6年度「障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業」
地域連携コンソーシアム会議（第3回）報告書

- 1 日時 令和7年1月29日（水）10：00～12：00
- 2 会場 ハイブリッド開催（会場：道民活動センタービルかでの2・7）
- 3 出席者 構成員11名（会場2名、オンライン9名）、同席者1名、文部科学省1名、事務局・説明者3名
- 4 内容
 - (1) 開 会
 - (2) 主催者挨拶
 - (3) 内 容
 - ①今年度の事業についての報告（社会教育課）
 - ・資料をもとに、今年度実施した取組についての報告を行った。
 - ・構成員から、課題とあった「特別支援学校等との連携、協力体制の構築」について、生徒に直接届けていくことも重要で、例えば、メタバースを取り入れた授業をしている特別支援学校との連携などの検討を求める意見があった。
 - ②今年度開催したコンファレンスについての報告・協議（社会教育課）
 - ・資料をもとに、12月に開催したコンファレンスについての報告・協議を行った。
 - ・構成員からは以下のような意見等があった。
 - 今後、ローカルなネットワークを地域でどのように生かしていくのか、地域で継続的に開催できる等の展望は見えてきたのか。（継続を希望する声も出てきているので、支援していきたい。と回答）
 - 参加した当事者の参画によるノウハウの蓄積は、まだまだ足りていない。もっと当たり前に当事者と一緒に学びの場づくりに参画していく工夫や、地域の当事者の活躍が必要。もっと道内の取組に着目して地域での実践の共有ができれば良い。
 - 企画から当事者が関わった学びが重要。平日開催の場合は、特別支援学校の学生が授業の一環として体験・参画可能な場とすることを検討してみても。例えば長野県では金曜午後と土曜午前の2日間日程で開催し、色分けして実施している。大学にも声かけしての体験ブースの実施や既存と組み合わせた開催もあれば良い。
 - 地域を巻き込んでいくのは良いが、協力者には大きく負担をかけるにも関わらず、対価（報酬・交通費など）の補償が難しいということは、懸念される部分。国や道の事業として終わらないよう、地域と協力して一緒にやっていく工夫が必要。
 - 特別支援学校にとっては、平日開催の場合は、小学部・中学部で一定数の参加が見込める一方で、旅費負担の問題がある。休日開催の場合は、参加者が減るかもしれないが移動のリスクは軽減される。いずれの場合でも、日程の早期周知は重要。
 - 地域での自走化を見据え、体験のプログラムを仕掛けた中で、自分たちでやっていこうと思えるようなワークショップ等があれば、調査とも連携して体系的になる。「障がい者の生涯学習」単体では展開が難しいので、既存の取組との連携や再構築が必要。学生が参画する場合は、スタッフという学びに加え、学んだことをフィードバックできる機会を設ける等の価値を加えると学校側も送り込みやすくなる。
 - ③ワーキングチームによる調査研究についての説明・協議（生涯学習推進センター）
 - ・資料をもとに、令和7年度に実施を予定している調査についての説明を行った。
 - ・構成員からは、関わっている人の意識、何か新しいものをつくらなければというものが強いように思う。現場にいる方たちの意見がくみ取れるアンケートがあっても良いのではないかという意見があった。
 - ④その他
出席者や文部科学省から情報提供や意見・感想などをいただいた。
 - (4) 閉会